

絵画の中のはきもの

戦場の靴屋

見一 眞理子

フィンセント・ファン・ゴッホが描いた『古靴』という作品があります。アンバー系の暗い色調の絵で、履き古されて泥で汚れたその靴には、持ち主の生活環境や性格、歩んできた時間までもが生々しく表れているようで、強烈な存在感が好きな作品です。ゴッホはこの「靴」にどんなメッセージを込めたのでしょうか・・・？ 私はこの作品を観るたびに、何故かその靴が「軍靴」に思えてしまうのです。

父は10代の若かりし頃に日本海軍兵士としてラバウル航空隊で戦闘機の整備をしていたと聞いています。戦地ではマラリアにかかったり、戦闘での恐ろしい出来事もたくさんあったらと思います。しかし、私たち家族には、そんな最中でも自分のやれることを一所懸命やって生抜いてきたエピソードだけを選んで話してくれたように思います。靴職人という技術を買われてか、いきさつは聞きそびれましたが、その後は基地内に小屋を建ててもらい、靴作りや靴の修理等を任されていたようです。内地から送られて来る靴の部品の他に、基地にあるタイヤのラバーを利用して戦友達の靴を作っていたそうです。戦況が厳しくなったころには塹壕の中で必死に靴を抱えて仕事をしていたという父の姿を想像すると、「靴」は「命」そのものだったのかも知れません。

ゴッホのこの作品に触発されて、私も煙草を燻らせ物思いに耽る老いた父と古い靴をモチーフに作品を描いたことがあります。靴に込めた職人の時間の重みが、皮革

の風合いにも父の顔にも深いしわとなって刻まれています。きっと父の戦争での体験談が私に筆を持たせてくれたように思います。

今年の広島原爆慰霊祭は珍しく雨天となり、最近の世界情勢を憂う涙のように映りました。69回目の終戦記念日を迎えた今年には特に、「戦争」の悲惨さや命の尊さについて強く考えさせられる年となったように感じます。父が戦地で作った靴はどのような道程を歩いて行ったのだろう・・・？

一人でも多くの方達が平和に向かって歩いて行ったと信じています。



海軍兵姿の父